

淫魔

館



「じゃあな弓野。明日は楽しみだな。」

「もう、絶対いかないってば。」

このT字路で男子二人と別れ、帰り道は馨と私の二人になる。



「田中のやつ、絶対麻由のこと狙ってるよ。」

「そうかな」

「絶対そうだよ。麻由のことよく聞いてくるし、さっきも胸元ばっかり目えいってたよ。」

「もおやだー」

馨は誰とでも仲良くできるような明るい娘で、私の親友だ。

「あいつ明日の肝試しで麻由にアタックする気だろうね。」

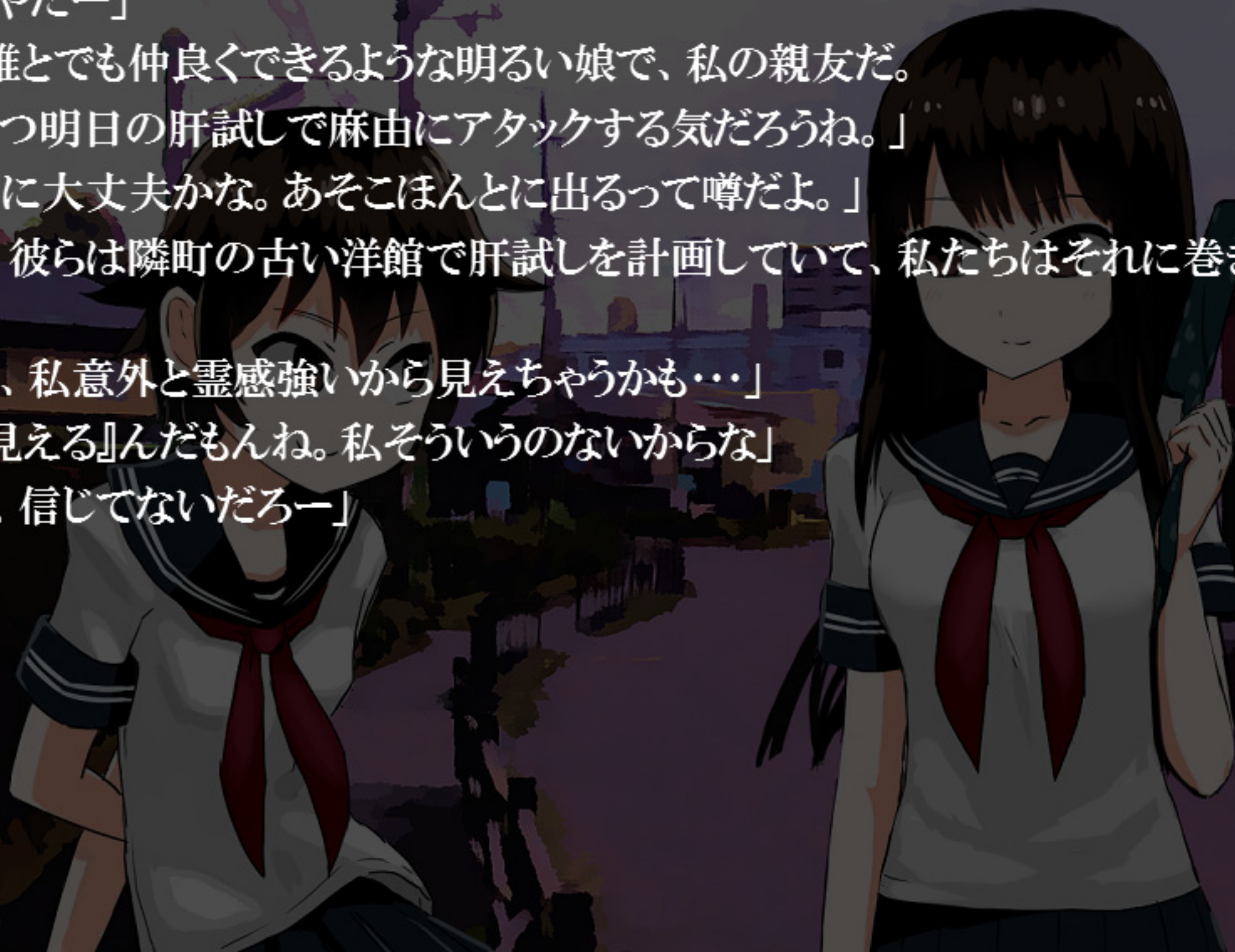
「本当に大丈夫かな。あそこほんとに出るって噂だよ。」

明日、彼らは隣町の古い洋館で肝試しを計画していて、私たちはそれに巻き込まれるのだ。

「ああ、私意外と靈感強いから見えちゃうかも…」

「馨『見える』んだもんね。私そういらのないからな」

「あっ、信じてないだろー」



翌日、テスト期間で早めに学校を終えた私たちは隣町に向かう。
洋館は小高い場所にあり、放置気味の山道を登っていく。
最初は皆興奮気味だったが、馨は登るにつれ言葉数が少なくなっていった。
私は少し心配するも、二人はどんどん先へ進んでいく。
生い茂る植物の中から建物が見え、洋館に到着する。
外観は蔦に飲まれてほとんど見えないが、2階建ての大きい建物だ。

白昼といえど少し中を覗けば、吸い込まれてしまいそうなほど暗く、不気味だった。
こんな場所でも、男子二人は勢い付いていた。私も躊躇いつつも、まだ面白半分でいた。

しかし馨は唐突に口を開く。
「ここやばい やめたほうがいいって…」

突然、私たちを取り囲むように建物の四方が軋みだす。

「や、やばい、なんだこれ…！」

「は、早く出よう！走るぞ！」

私たちは全速力で廃墟から脱出した。

「な、なんだよアレ…！」

全員、顔が真っ青になっている。

「…待って、馨 馨は？」

「…！！」

馨がいない。

「い、いつから…？」

誰も答えることは出来なかった。あのとき、皆人を気にしている余裕はなかった。

まさか、まだあの廃墟で…私は愕然とした

「…田中くん、あの時、何を見たの」

「お…女の子 髪の毛の長い…」

その時から私たちは馨を見ていない。

失踪事件として扱われたが、捜索しても何も見つからなかった。

あの体験の後、私たち三人は気まづくなった。

皆馨を置き去りにしてしまったことに罪の意識を感じている。

しかし、あの恐怖を感じた後で、誰も探しに行こうとは言い出せない。

あれ以来、T字路からの帰り道は私一人になった。

いつもそばにいた馨。

なぜあの時ちゃんと彼女のことを見ていなかったのか。

私が流されず、彼女の言うことを聞いていればよかった。

あの後彼女はどうなったのだろうか。

考えるほどに辛くなってしまふ。

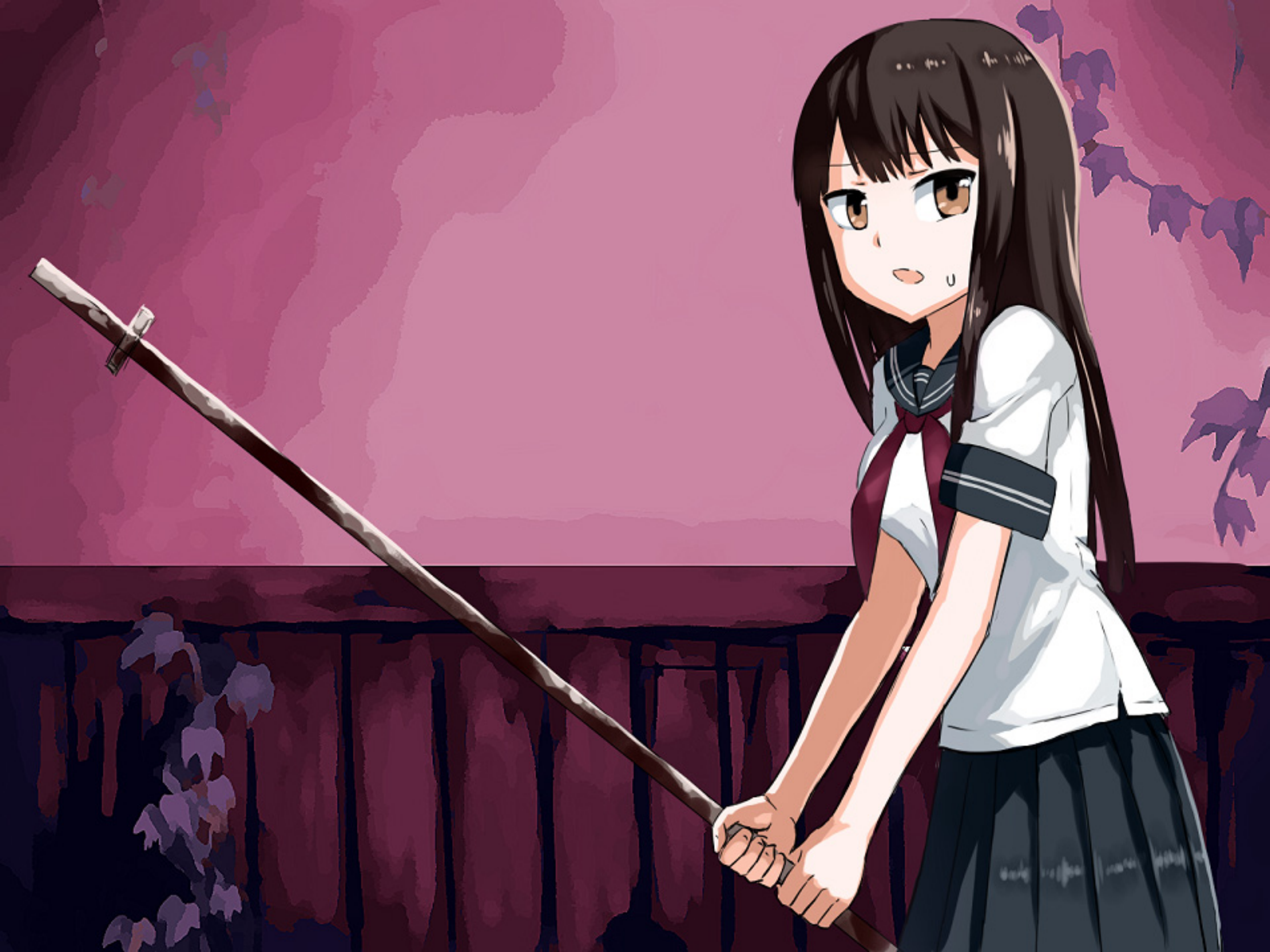
「…馨？」

ふと馨の声が聞こえた気がした。気のせいだと思ったが、確かに呼ぶ声が聞こえる。

気付けば私は吸い寄せられるように一人、荒れた山道を登っていた。

…来てしまった。目の前にはあの洋館が、真っ暗な口を開けて待ち構えている。

私は一人、廃墟に足を踏み入れた。



廃墟の中は静まり返り、不穏な空気が漂っている。

(馨…絶対に見つけ出さなきゃ…。)

転がっていた鉄パイプを武器に、麻由は闇の中を進む。

剣道部である麻由は、得物があればある程度は身を守ることが出来る。

しかし、この状況ではまともに戦えるかも、そもそも通用する相手かもわからなかった。

手が震え、足はすくんでいる。

(…ダメ、もっとしっかりしなきゃ。)

麻由は鉄棒を強く握り締め、先へ進んだ。

ぎし、ぎし、と歩くたびに古い床が鳴る。

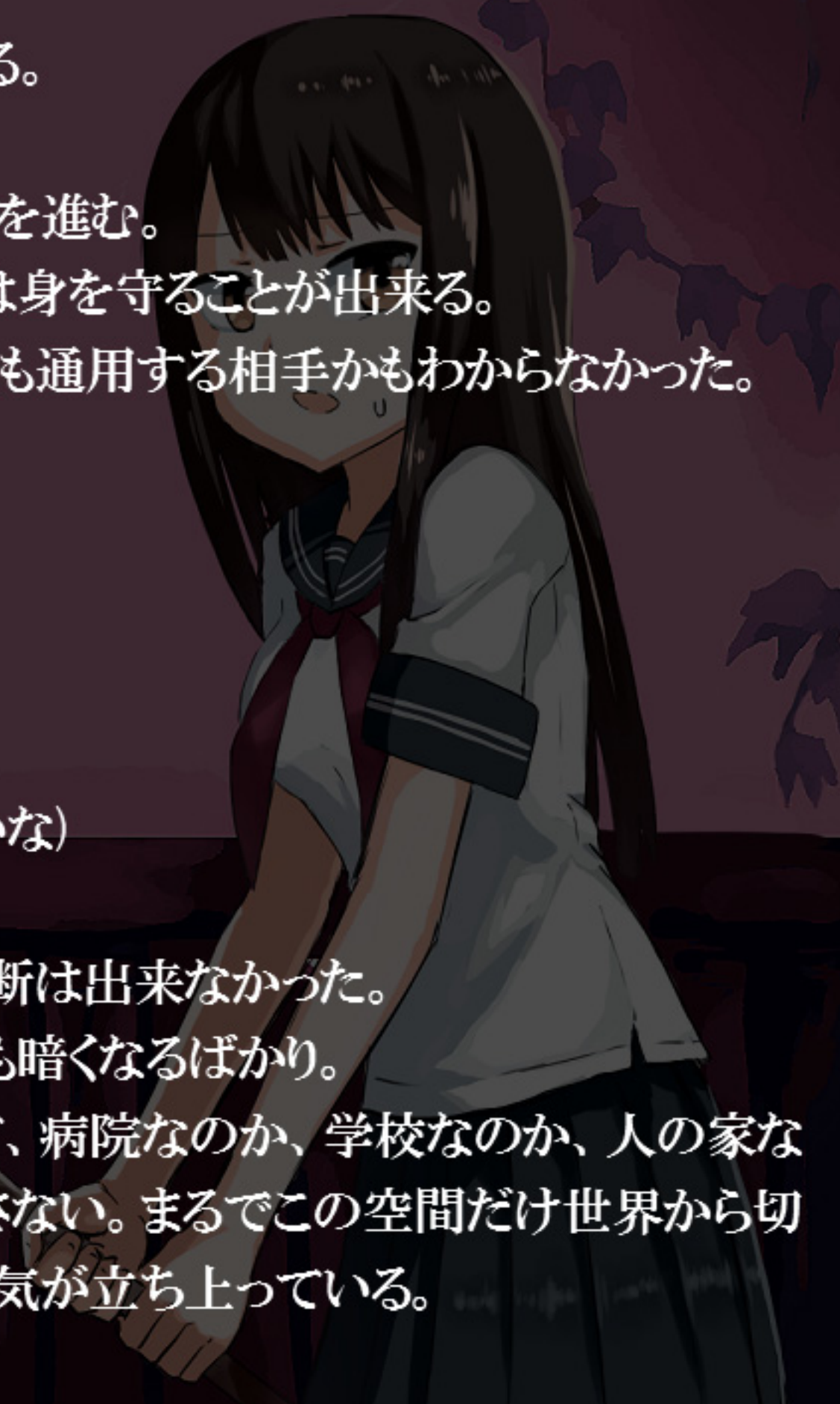
(…随分進んだけど、前みたいなのは起きないな)

以前のように壁が軋んだりはしない。

しかしそれは隙を窺われているようでもあり、油断は出来なかった。

内部は外から見たよりも随分広く、いくら進んでも暗くなるばかり。

館の中は物が残っていない上に酷く崩れていて、病院なのか、学校なのか、人の家なのかもわからなかった。蔦が窓を覆い、光は射さない。まるでこの空間だけ世界から切り離されているようだ。内部にはどこか陰気な空気が立ち上っている。



麻由は気配を感じ、足を止めた。

ぎし、と天井から音がする。

(何か、いる…！)

バキッ、バキバキッ!!!

突然、壁の裂け目から手が飛び出し、麻由の腕を掴んだ。

「っ…!!?きゃああっ!!!」

掴んだ腕が身体を壁側に引き寄せる。

「やあっ…!!いやああっ…!!」

次々と壁から手が飛び出し、麻由を磔にする。

掴まれた衝撃で落とした鉄パイプは、

ガランガランと大きな音を立て、さらに魔物を呼び寄せる。

建物の隙間の魔物はドタドタと音を立て、麻由が磔になっている壁の裏に群がる。





「ううっ、くうっ…!!」

その手は映画やゲームで見るような、「ゾンビ」のようだった。

死人のように白い皮膚に血管が浮き出ている、生理的嫌悪にぞわぞわと鳥肌が立つ。

身を振じらすも、大男のような力で拘束され、逃げ出せない。

両脇の亀裂から手が現れ、麻由の両乳房に掴みかかる。

「あ…っ、ん」

急に敏感な部分をおさえられ、脱力してしまう。

魔の手はさらに両乳のトップを押さえ、ぐにぐにとマッサージするように弄ぶ。

「あふぁ…、く、やめ…」

麻由の大きめの、やわらかい胸に指が沈み込む。

「ああ、く、やぁんっ」

指先は「突起」に集中していく。どうやら乳首を捜しているようだ。

しかし、麻由は陥没乳首で、服越しからは容易に見つからない。

『手』は探すか揉み込むかで感じさせ、麻由の乳首を勃起させようとしている。

(こんな…こんなのって…!!)

この手は、明らかに麻由を犯そうとしている。

麻由は、淫魔の巣窟に足を踏み入れてしまったのだ。

淫魔の館は進むほどに暗くなっていく。最早目が慣れるまで、手探りで進むしかないほどだった。淫魔に気付かれることのないようにできるだけ音を立てず、慎重に進む。そろそろと歩いているとツルのようなものが足に引っかかり、転んでしまった。

「痛…何、こんなところにまで蔓がはって…」

起き上がろうとしたところ、床に着いていた手にも蔓が引っかかり…

(きゃっ もう、何…)

それは蛇のように両手に絡み付いていた。

「え、あぁっ…！」

謎の蔓に麻由は引きずり込まれる。

気配こそ無かったものの、麻由は淫魔が仕掛けた罠にかかってしまったのだ。



徐々に陰気な気配が辺りを包む…。

「うっ…！く…っ」

暗くてよく見えないが、足にもつたが張っており、引っかかって動きづらい。

両手は万歳でスカートはまくれ、がら空き…

こんなあられもない姿で淫魔に襲われたら、と思うと一刻も早く脱出しなければならなかった。うっすらと甘い香りが周囲に漂い、嫌な予感をさせる。

徐々に目が慣れ、部屋の様子が見えてくる。

蔓が動き回り、部屋を覆い尽くそうとしている。

(…！早く出なきゃ…！)

ふと視線を横にやると、巨大なつぼみが鎮座していた。今にも開きそうな花びらの中には、巨大な目玉が覗く。

(…っ!!)

おぞましい淫魔の姿に、麻由は冷静ではいられなくなった。

そして焦れば焦るほど、触手が絡まり動けなくなる。

「ふう、ふう…」

じくじくと股間が疼く。下着はぐっしょりと様々の液で濡れ、歩くたびに股が気持ち悪いが進むしかない。実質二体分の淫魔に「おあずけ」された麻由は行き場を失った情欲に苦しめられていた。

オナニーで解消しようかともよぎったが、そんなことをすれば、その隙を淫魔に浸け込まれるに決まっている。

「はあ、ふうう…、馨…」

一瞬淫魔に滅茶苦茶にされたいともよぎったが、親友への思いが麻由を踏みとどめた。

そんな麻由にまた新たな試練が立ちはだかる…

天井から、にちゅにちゅと嫌な物音が聞こえる。

何かが、這う音。

ぽとっ ぽとぽとっ

「っ…!!きゃああっ…!!」

落下してきたのは蛭やナメクジのような魔物だった。

ぬるぬるした粘液が体表を覆い、あちらこちらを粘液塗れしている。

獲物を絞った淫蟲は次から次へと麻由の方へ落下する。



麻由は落下してくる淫蟲の内側を見てゾッとした。

まるで女性器を連想させるような縦に入った裂け目、際には歯のように粒粒が並んでいる。

この淫魔がどうしようとしているか、麻由は嫌でも想像がついた。

麻由は鉄パイプを振るい、必死で落下してくる蟲を払った。

「あ…っ！」

しかし降ってくる淫虫を払うのに必死で、下から沸く蟲に気がつかなかった。

もうすでに4、5匹脚に貼り付いている。

「いや…っ、この…っ!!」

脚を振るうが

「っ…!!ひ…っ!!!」

蟲は離れまいと強烈に吸着し、それどころか内部で

粒粒を立てたり、無理に吸引したりして刺激を与えている。

そんなことをアソコでされれば…と考えるだけで麻由の身の気がよだった。

淫蟲は建物の隙間からどんどん溢れ出す。このままでは吸い付かれるのも時間の問題だ。走らなければ淫蟲からは逃げ切れないだろう。